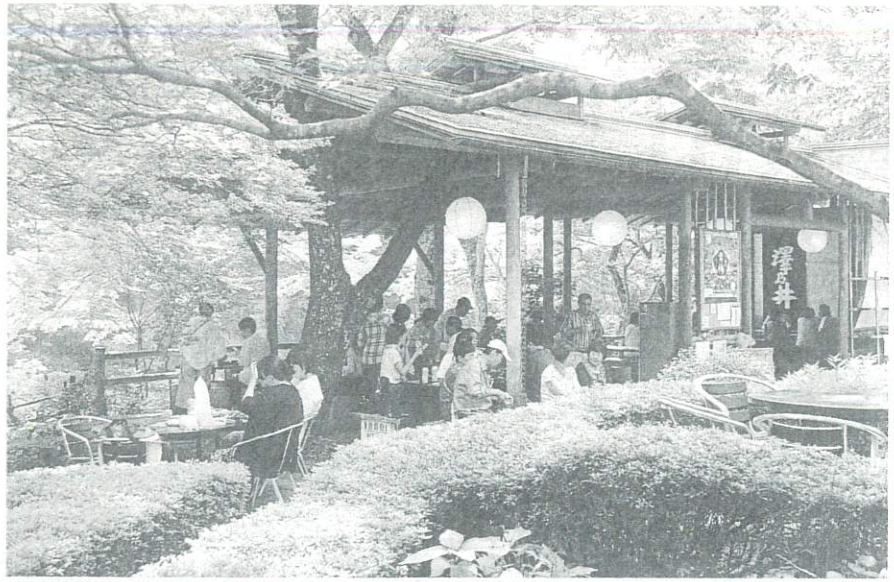
気軽に寄って 日本酒に酔って

江戸期のつまみ 楽しめる施設も

酒蔵のそば レストランやバー続々

和の文化に高い関心 ■ 立地生かし海外客ら呼び込む



平日の日中でも多くの人でにぎわう小澤酒造の飲食施設「澤乃井園」＝5月20日、青梅市沢井2丁目

都内の酒蔵が相次いで、蔵の近くにレストランやバーを開業している。酒離れが進む中、お酒を飲んでもらう機会を増やす狙いがある。訪日外国人客（インバウンド）が多く訪れる施設もあり、日本酒ファンの裾野は少しずつ広がっているようだ。

日本酒「嘉泉（かせん）」で知られる田村酒造場（福生市）は5月、レストランやバー、物販店が入った施設を酒蔵そばの駐車場に来春開くと発表した。広さは約560平方㍍で平屋。レストランでは創作和食を出すという。物販店では、おちょこやグラス、酒かすを使った菓子も並べる。

同社によると、今も、市内にある米軍横田基地の関係者が、酒蔵や敷地内の日本庭園の見学に訪れているという。担当者は「和の文化への関心は高い。首都圏に住む人や海外観光客らをもっと呼び込める施設にできれば」と期待を込める。

すでに、会社や酒蔵近くにお酒を飲める場をつくったのは、東村山市の関連メーカーが造る「金婚」などを販売する豊島屋本店（千代田区）だ。神田に2020年、立ち飲み居酒屋を開業した。看板メニューの一つは豆腐の田楽だ。400年以上前の江戸時代、居酒屋として評判になった一品を復活させた。

地の利がよいためか外国人の来客も多く、今春はスーダンからの観光客もぶらりと訪れたという。「気軽に立ち寄って日本酒とそれに合う食べ物を知ってもらい、日本酒ファンが増えればうれしい」と担当者は話す。

11年に約1世紀ぶりに酒造りを再開した、23区内唯一の酒蔵「東京港醸造」（港区）は昨年1月、隣のビルの10階にラウンジをオープンさせた。自社の「江戸開城」や日本酒カクテルと一緒に料理を楽しめるという。

近年、酒蔵併設の飲食施設の開業が相次ぐが、その歴史は古い。

都内で最初に始めたとされるのが、「澤乃井」の小澤酒造（青梅市）だ。1967年、多摩川を見下ろす敷地内にバーベキュー場として「澤乃井園」を開いた。

同社によると、灘（兵庫県）や伏見（京都府）などにある大手酒蔵メーカーに対抗し、知名度を上げようとテレビCMを流したが効果は薄かった。そこで思いついたのが、バーベキュー場だったという。

澤乃井園はその後、軽食とお酒を楽しむ施設となり、豆腐料理の料亭などを増設。2021年には、酒造用の仕込み水で作ったデザートを出すカフェもオープンした。同社は「東京という立地を生かし、多くの人が酒蔵に足を運んで飲食することが、お酒のおいしさに気づいてもらう何よりの策」としている。

（森治文）